

ジョン・ヒック自伝にみる「多-信仰」容認のための社会活動 — 多元的な宗教教育プログラムの構築 —

間瀬 啓允

はじめに

『ジョン・ヒック自伝』の第14章に、民族混交の英国第二都市、バーミンガムにおける「多-信仰」容認のための実践的な社会活動が詳細に論じられている。⁽¹⁾

1967年、ヒックがバーミンガム大学に神学教授として招聘されたとき、バーミンガムの街はカリブ海地域からの移民や、インド、パキスタンからの移民によって、文字通りの民族混合の状態にあった。最大の民族集団はアフリカ系カリブ人で、大抵はペンテコステ派のキリスト教徒であった。キリスト教以外の集団にはイスラーム、シク教、ヒンドゥー教があったが、さらに小さい集団には、仏教、道教、ジャイナ教、バハイ教の信徒集団もあった。こうした民族混合の状態において、キリスト教の立場から「多-信仰」(multi-faith)を容認し、これを広く社会に認知させ、公教育の現場に反映させることがヒックの任務となった。

宗教教育専門委員会の新たな設置

バーミンガムの行政機関である「地域交流委員会」(CRC)は、宗教教育専門委員会の新たな設置を予定し、委員長の役をヒックに要請した。そして1969年3月、第1回会合が市会議事堂の大会議室で開かれた。そこにはイスラーム、シク教、ヒンドゥー教の代表者たちが集められた。その後、この委員会にはユダヤ教のラビやカトリックの神父たちも加えられた。

ヒックは、できるだけ多くの専門委員と親しくなることを心がけ、委員の属する宗教集団からの招待にはどれにも応じた。ヒンドゥー教徒の祭りである

「ラーマ・ナウミ」(ラーマチャンドラ顕現祭)や「ディワリー」(灯明の祭)にも参加した。ムスリムたちと共に祈り対話するために、イスラーム文化センターにも出向いた。またこのセンターで開かれた「ワリマ」(結婚披露宴)にも出席した。シク教の海外教師会にも出向いた。またタウンホールで開かれたグル・ナーナク生誕500年祭の祝典にも参加した。幾年かにわたり、婚礼や葬儀、ディワリーの祝い、晩餐会、過ぎ越しの祭など、種々の集まりに参加し、宗教を異にする委員たちとの交流を深めた。

キリスト教の教会と同じようにして、モスクやシナゴーク、シク教寺院やヒンドゥー教寺院で時間を過ごすようになってから、ヒックはある重要なことに気づき始めた。一方で、宗教の外観はみなそれぞれに異なる。例えばヒンドゥー教の寺院では光景・音・匂い・色彩など、みなインド独特のものである。また外観のみならず、言語や概念、聖典や伝統などもみな異なって独特である。しかし、さらに深いレベルで見れば、このように異なるすべての礼拝場所で、本質上、明らかに同じことが行われている。それは、古来の伝統に守られて善男善女がその場に参集し、その伝統のゆえに彼らの生命を真に生かすことのできる高次の神祕的実在に向かって、彼らの精神と心が「高みへ」と開かれていくという事実である。ヘブライの預言者の言葉でいえば、「正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩む」ように彼らは召し出されているのである。この基本的なレベルにおいて、宗教はみな一致するように思われる。そこでヒックは、イスラーム神祕主義の詩人ルーミーの言葉を引用する。「ランプは違えど、光は同じ。光は彼方から来る」。⁽²⁾

この洞察を共有できる人物として、ヒックはカトリック神父のパトリック・オマホニーの名を挙げている。オマホニー神父は癌で早すぎる死を迎えたひとであるが、ヒックは神父のことを「私の知るうちで素晴らしい働きをした人物の一人であった」と評している。⁽³⁾神父は人への奉仕に全身全霊を捧げ、教会の信徒を育成し、教導した。例えば神父の指導によって、信徒たちは多額に上る医薬品をインドのカルカッタやアフリカの各地へ送った。その多くはパーミンガム在住の医師たちからの寄進によるもので、製薬会社から送られてきた試供品であった。神父はアムネスティー・インターナショナルの活動にも積極的に携わり、武器製造に関わる企業やアパルトヘイトへの影響を調べ上げ、大司

教区に対し南アフリカからの投資の引き上げを行わせた。またその他、幾つかの分野においても持ち前の指導力を発揮した。⁽⁴⁾

同じように長年の友人になったのは、かつてインドで宣教師を務め、ガンディーの信奉者となり、一時はネルーの秘書をも務めたことのあるレオナルド・シフであった。またキリスト教以外の信仰を代表する専門委員の幾人かとも親しくなった。ダーシャン・シン・ボガル(パーミンガムCRCの後の副委員長)、バシル・アワン、バシル・ワライク(AFFORの活動の同労者)たちであった。⁽⁵⁾

学習指導要領への新たな取組み

パーミンガム市当局に対して宗教教育専門委員会は、「地域教育局」(LEA)所轄の学校における宗教教育プログラムの更新にあたり、新たな宗教コミュニティに関する規定の設置を提言し、さらにパーミンガム市における新学習指導要領の策定を提案した。英国の宗教教育は、1944年制定の教育法の下で、地域教育局によって採択された古い公認学習指導要領に従って行われていたからである。「古い」というのは、この公認学習指導要領はキリスト教中心の伝統的な聖書学習を主体にしているもので、ムスリムやシク教、ヒンドゥー教の子どもたちにはまったく適合しないものであったからである。既にいくつかの学校では、実情に合わせて、宗教グループ別の授業を実施してはいたが、大抵はその場しのぎのもので、ニーズのごく一部を満たすものにすぎなかった。

もっとも英国全土にわたる教育界の動きとしては、宗教教育の新たな改革に向かう機運の盛り上がりを見せていた。この機運に乗じて、パーミンガムの教育委員会は新学習指導要領作成の必要を認め、その作業を監督する調整委員会の委員長をヒックに要請した。ヒックはキリスト教以外の信徒代表も委員に加えることを条件に、この要請を受け入れた。

時はいよいよ熟した。1970年、新学習指導要領作成のための審議会の発足に伴い、地域交流専門委員会内で行ってきた活動はこの新しい審議会に引き継がれ、地域交流専門委員会は宗教文化専門委員会へと改組されることになった。新学習指導要領を作成するための法令審議会は、教員の代表、地域教育局の代表、英国国教会の代表、他の諸教会の代表から成る計四つのグループによって

構成され、キリスト教以外の委員たちは四つ目のグループに含められることになった。

その頃のバーミンガム市議会は保守党が多数派を占めていた。1970年3月の第1回会合は保守党長老議員を議長として開催された。ヒックを長とする委員たちは「多-信仰」の指導要領が必要であることと、その必要性は教会その他の宗教組織の活動を学校へと広げるためではなく、純粋に教育上のニーズによるものであることとを強調した。そこで新学習指導要領は「多-信仰」を考慮すべきことと、さらには世俗的な世界観をも勘案すべきことで一応、意見の一致をみた。

次に、40名ほどの審議会の委員たちは、異なる年齢層に対する学習指導要領作成のためのいくつかの作業部会に組み入れられた。これらの作業部会の仕事を中央委員会がコーディネートして、最終的に簡潔な公的学習指導要領と、かなり大部の教師用ハンドブックとを作成することになった。学齢の低い子どもたちには「教える」ということを主目的とし、学齢の高い生徒たちには「生徒自身に選択させた宗教（普通は自分自身の宗教）を主専攻とし、その他にも一つか二つの宗教を選択させて副専攻とする」ということを狙いにした。ただしキリスト教に関しては、英国史の学習に必須の宗教としてかならずこれを主専攻ないし副専攻の何れかにしなければならないことにした。この学習指導要領の中で激しい論争を呼んだのは、諸宗教と同じように共産主義やヒューマニズムのような世俗的信仰についての学習をそこに含めたことである。この論争は「要領」の持つ多面的な宗教教育プログラムの是非を問う重要な議論へと展開していった。

全ての作業が完了するまでには数え切れないほどの会合が重ねられ、ほぼ5年の歳月が費やされた。作業に着手したのは保守党が市議会と党のときであったが、学習指導要領の改訂案が公表されたのは労働党が与党となった数年後の市議会においてであった。改訂案は、結果的には採択されることになったが、幾人かの保守党員やアングリカン主教は、共産主義やヒューマニズムは「生に対する非宗教的姿勢」であるとして、学習指導要領に含めることに激しく反対した。

新学習指導要領をめぐる騒動

新学習指導要領をめくって、市議会内において、また報道関係者の間においても、かなりの騒動が沸き起こった。英国国教会の諸原則に従う全国宗教教育推進協議会は新学習指導要領を直ちに違法と宣言した。そのために教育局長は市の顧問弁護士に意見を求めることになった。この異議申立ての審理期間中、改訂学習指導要領の出版は差し止められた。顧問弁護士は、改訂学習指導要領の提出形式がオックスフォード英語辞典（OED）の辞書の定義による学習指導要領の形式を取ってはいないものの、この定義に合致するものとして拡大解釈することは可能であると述べた。彼はキリスト教以外の宗教を教えることが含まれることにも、また宗教を学ぶ上で役立つ限り「生に対する非宗教的姿勢」に関する学習が導入されることにも、何ら反対する理由を見出さなかった。そこで学習指導要領の改訂を法的に認めさせるために小委員会を設置し、事の進展をはかった。

最終的な審議の成り行きは、1974年11月開催の審議会の様子から明らかに知ることができる。

午前10時30分、新学習指導要領審議会開始。モイラ・シモンズ（労働党市議）が議長。全員出席。教育局長が法的取組の状況を報告…。その折、ドーズ議員（保守党）が「生に対する非宗教的姿勢」に関する問題を提起し、わけても共産主義は学習指導要領から除外すべきであると主張。これに対して、偉大なる世俗的信仰についての学習は今日の宗教的状況を理解する上で大いに助けになるものであるから新学習指導要領には含まれるべきであるとする反論も行われた。しかしドーズ議員は「非宗教的姿勢」への言及の削除を正式に提議し、シドニー・ゴールドがこれを支持した。この二人が当該提議に対する賛成票を、それ以外の全員が反対票を投じた。その後、非宗教的姿勢についての学習も加えるという原則を含め、1970年当初の会合において容認された諸原則の再確認が提議された。これはドーズ議員の反対とシドニーの棄権を除く全員の賛成票をもって可決された。このように論争と論議を尽くした結果、この問題はほぼ全会一致で解決をみた。⁽⁶⁾

この騒動の成り行きを、ヒックは日記の中で、こう述懐している。

1975年3月14日、ケンブリッジにて。(スタントنز第1期連続講義の最終回のためケンブリッジに出張中)。

「ガーディアン」紙で、学習指導要領の改訂がバーミンガム市の教育委員会によって昨日採択された旨を読む…。政治的、宗教的折衝に費やした1年を含む計5年間の仕事これでやっと終わった。バーミンガムのヒューマニストたち(あるいはむしろ彼らをハリーが利用していると言うべきか)は新学習指導要領があまりに宗教的すぎると批判し、これを違法としてひどい誤解だと私は思うが、粉碎することを望んでいる。[後日、5月8日、ハリー・ストープス=ロウと「和解のコーヒー」を交わす。新学習指導要領に反対するヒューマニストたちの法的行動はほのめかされてはいたものの、今後、実行に移されることはないだろうと推察される]あの保守党員たちは共産主義がバーミンガムの学校に強引にねじ込んできたと今でも不平を言っている。しかし新学習指導要領は印刷され、直ちに使用される段階になっているようだ。数年後、あの大騒ぎは何だったのかと人々は不審に思うことだろう。⁽⁷⁾

ヒックの投書

採択されるまでの長い過程において、ヒックは幾度も「バーミンガム・ポスト」紙に宛てて投書の手紙を書かなくてはならなかった。

バーミンガムの新たな宗教教育指導要領に関する記事が貴紙のコラムに連載されたことで、ある種の神話が創られてしまいましたが、それが事実であると誤解されるようになる前に、その誤りが暴かれなければなりません。それはハンドブックに共産主義に関する項目が含まれることになったのは教育的な判断というよりむしろ政治的な判断の結果であって、共産党員あるいは他の左翼勢力が法令審議会に不当に押しつけたものだという神話で

す。この神話には一片の真理すらも含まれていません。地域の学識経験者、宗教研究の教員、全教会の公式代表、教育や神学の専門家、地域教育局のメンバーたちによって構成されるこの審議会には、共産主義者やその同調者は一人も含まれていません。1974年2月の総選挙の時期からは、不幸にも政治色をもって論じられるようになりましたが、それ以前、もちろんそれ以後にも、この新たな学習指導要領を関係者一同、純粋に教育上のこととして捉えてきました。たまたま教育委員会と市議会内で労働党が多数を占める時期に、審議会がその作業を完了して報告を行いました。そもそもこの審議会は保守党多数期の教育委員会および市議会の下で招集されたものです。新学習指導要領によって「幾つかの信仰」と「他の主要なイデオロギー」をキリスト教と同様に扱おうとする基本的な決定は、保守党の長老議員を議長とする1970年6月の正規の会合である審議会において採択されたものです…。法令審議会が1970年に採択したこれらの原則は、すでに有能な宗教教育の教員たちが何年にもわたって行ってきた現場の教育に基づくものです。この新たな学習指導要領が重要な進展を示しているのは何か新しい提案をするという意味ではなく、大半の教員がすでに長いあいだ教育上望ましいと考え、多くの場合、すでに長いあいだ実践してきたことに対する法的認証を与えるという意味においてです…。⁽⁸⁾

「多-信仰」を容認する宗教教育

新学習指導要領は「多-信仰」を認める宗教教育へと向かう全国的な動きの一端であった。この学習指導要領改訂の全過程を通じて、当時、バーミンガム大学で宗教教育を教授していたジョン・ハルの存在が重要な推力となった。彼は宗教教育とその諸問題に関して精通しており、教育の重要な側面として、かつての宗教的教化から今日の宗教教育へと向かう流れを作った先駆者であった。全国的には、著名な宗教哲学者であるニニアン・スマートによって、この展開は先導されていた。

ヒックは共産主義とヒューマニズムに関する教えを教育内容に含めることを強く支持していたが、そのこと以上に新学習指導要領においては「多-信仰」

的な基本的性格が受け入れられるよう腐心していた。前者を疑問とする攻撃は、保守党員たちの注意を後者の問題から逸らす避雷針の役割を果たした。

学習指導要領の改訂が採択されると、バーミンガム市内の学校には直ちに「要領」8000部が、教師用ハンドブックと一緒に配布された。当初の意図通り、学習指導要領は現場の指導実態に照らし、「宗教教育に関する常設顧問審議会」(SACRE)によって継続的に改訂されていった。ヒックも一時期その委員を務めた。今日では宗教教育あるいは宗教研究の専任教員は、事実上、全員が「多-信仰」を教えるための訓練を受けている。しかし当時はまだ宗教の内容をきちんと教えられる有資格の教員は不足していた。

この間、宗教文化専門委員会は、さらに別の問題へと視点を移し、委員会活動を続けていた。活動の第一は、特有の文化的あるいは宗教的背景をもつアジア人の患者が抱える病院での問題であった。委員たちは看護師や医師、病院管理者たちと何度も会合をもち、食事のことや言葉の壁、出生や死亡に関する特有の信念や慣習、さまざまに異なる信仰の聖職者たちによる病院訪問、アジア人女性の男性医師に対する態度、アジア人男性の女性医師に対する態度などの問題を題材に議論を重ねた。この結果をもとに、病院管理者・看護師・医師の手引きとして小冊子を作成し配布した。

別の問題では、刑務所におけるアジア人処遇の問題があった。委員たちは刑務所の長官と面談し処遇の改善を求めた。

さらには、学校における性教育の問題、スカートではなくズボンの着用許可を願うムスリム看護婦たちの制服の問題、オートバイを運転するシク教徒のヘルメット着用の問題 代わりにターバンを巻くことが事実上許可された、地域の宗教放送局におけるキリスト教以外の信仰のための放送の提供、遺体を棺に収めないというムスリムの慣習を容認する要求 最終的には取り下げられた、ムスリムが食する食肉(ハラール・ミート)のための屠殺を行う条件に関する問題など、問題解決に向けて具体的な話し合いが進められた。⁽⁹⁾

諸信仰間協議会の創設

1975年1月、バーミンガムに諸信仰間協議会が創設された。これはヒックの提案によるもので、初代議長にはヒックが選出された。シク教寺院で行われた初会合には、ヒンドゥー教、キリスト教、イスラーム、ユダヤ教、シク教の代表者が出席した。そして協議会の役割として、信仰を異にする者同士が尊敬と確信を持って相互に出会い、理解を深め合うために一連の会合の場を設定すること、少数派の人びとの抱える特殊な問題を明らかにし、その問題解決に向けて進言するようなチャンネルになること、信仰間の対話を進めるための枠組みを提供すること等々を確認し合った。¹⁰⁾

発足した初年度から数年にわたり、「生命の道」と題する会合を幾度も重ね、互いの信仰内容を話し合った。また少数派グループの抱える特殊な問題についても話し合った。ちなみに、バーミンガムの右翼団体であるナショナル・フロントの活動に対して抗議声明を公表したこともあった。しかしながら、それぞれ異なる宗教団体内によく訓練された神学者がいなかったため、ヒックの議長時代の協議会では真に重要な神学的対話は生まれなかった。けれどもヒック自身は「潜在力は未だ十分に発揮されてはいないが、それでも協議会が存続していることを私は嬉しく思う」と述べ、議長を引き継ぐ者への期待感を明らかにしている。¹¹⁾それでもキリスト教とイスラームの対話は、その頃、バーミンガムの郊外にあるセリ・オーク・カレッジ内の研究所 Centre for the Study of Islam and of Christian-Muslim Relationships において始められ、今日に至っている。¹²⁾

おわりに

60年代後半から70年代を、ヒックは「多-信仰」容認のための実践的な社会活動に邁進した。その期間はヒックの大学在職期間(バーミンガム大学教授1967～1982年)にあたる。学習指導要領の改訂作業の委員長、諸信仰間協議会の議長、SACREやラジオ・バーミンガムの宗教顧問委員会の委員、クィーンズ・カレッジの理事、セリ・オーク・カレッジの評議員、同時にバーミンガム大

学神学部における研究と教育、そして中でも最も多くの時間をさいて生産的な仕事をしたのはAFFORの議長職であった。¹³会合は頻繁に行われ、帰宅は夜半になることもしばしばであった。家族思いのヒックは、家族と過ごす時間が少なくなることを遺憾無く思いながらも、家族が全面的に協力してくれたことを心から感謝した。¹⁴しかしキリスト教とは異なる信仰に生きる人々との交流によって、家族もまた、異なる信仰や文化、肌の色の違う人々への思いやりをことさら大きく抱いたことであろう。

注

- (1) John Hick, *An Autobiography*, Oxford: Oneworld Publications, 2002, 2005. (『ジョン・ヒック自伝』 間瀬啓允訳、トランスビュー、2006年)。ジョン・ヒックの経歴及び業績については、本論集第11号掲載の研究ノート「ジョン・ヒック自伝と遠藤周作」を参照されたい。
- (2) 『自伝』 p. 229.
- (3) 『自伝』 p. 230.
- (4) 『自伝』 p. 230.
- (5) AFFORの活動については、本論集第12号掲載の研究ノート「ジョン・ヒック自伝に見るAFFORの活動」を参照されたい。
- (6) 『自伝』 p. 234.
- (7) 『自伝』 pp. 235-236.
- (8) 『自伝』 pp. 236-237.
- (9) 『自伝』 pp. 237-238.
- (10) 『自伝』 p. 239.
- (11) 『自伝』 p. 239.
- (12) John Hick, *God Has Many Names: Britain's New Religious Pluralism*, London: Macmillan, 1980. (『神は多くの名前をもつ』 間瀬啓允訳、岩波書店、1986年、84頁)。
- (13) 注(5)を参照。
- (14) 『自伝』 p. 240.